

日吉台地下壕保存の会会報

第91号

日吉台地下壕保存の会

2009年度 第2回 総会・ガイド養成講座のお知らせ

2009年度総会のお知らせ

昨年の総会から、あっという間に一年が経ち、今年も総会のお知らせをお送りする時期になりました。今年度も本会では名古屋大学での戦争遺跡保存全国シンポジウムをはじめ多くの取り組みがなされました。総会では一年間の活動を振り返りつつ、新年度の活動方針について討議されます。

総会に先立って横浜大空襲を記録する会会長今井清一先生（前横浜市立大学教授）をお迎えし、横浜の空襲についてご講演いただきます。またこの間調査が行われてきた日吉、大倉山などの空襲の実態について報告が行われます。これまで明らかにならなかった横浜北部の空襲について検討がなされる場となることが期待されます。皆様のご来場をお待ちしております。

記

日時：2009年5月23日(土) 1時～4時 (12時半開場)
場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 藤山記念館2F大会議室

- 1時～3時30分
講演：「横浜空襲の位置づけ」
今井清一氏（横浜市立大学名誉教授 横浜の空襲を記録する会会長）
調査報告：「日吉の空襲について」
茂呂秀宏（日吉台地下壕保存の会運営委員）
- 3時30分～4時
総会：2008年度活動報告 2009年度活動方針
決算報告 予算案
運営委員会人事
その他

第2回ガイド養成講座

日時：2009年6月20日(土) 1時～4時

場所：慶應大学日吉キャンパス 来往舎2階 大会議室

講師：櫻井準也先生 (尚美学園大学総合政策学部)

題目：日吉台とその周辺の遺跡

講演： 1時～2時30分

遺跡探訪ツアー 2時30分～4時

この講座は現代ばかりではなく、日吉台地の生い立ちを自然地理学の立場から、考古学の立場からなどからいろいろ多角的に勉強しようとして企画しました。

まず1回目として松原彰子氏(慶應義塾大学経済学部教授)に「日吉台地の成り立ち—自然地理学の立場から—」という題目で縄文海進(約6000年前)時代まで講演をしていただきました。第2回目として弥生時代から古墳時代の遺跡を中心に講演をして頂く予定です。また、講演のみではなく周辺の遺跡探訪ツアーも企画しております。楽しみにしてください。

また、ツアーがありますので楽に歩ける服装でおいで下さい。

日吉台地下壕入坑部発掘される

4月12日、現地見学会に300人!

慶應日吉キャンパス蝮谷(まむしだに)で、体育館建設工事に際し、昨年9月末工事エリアの東側に旧海軍日吉台地下壕(軍令部第三部・東京通信隊・航空本部等地下壕)の入坑部が三基(南より2a、3a、4aと呼ぶ)発見されました。慶應義塾は「日吉台地下壕に関する諮問委員会」の審議答申を経て体育館の建設を北に60m移動することにしました。そしてアジア太平洋戦争末期に日本海軍が築造した地下壕の建設工程、入坑部の構造等解明のために発掘調査が行われました。

地下壕保存の会としてもこの航空本部等地下壕出入口はまだ未調査であり、是非公開して現状保存を慶應義塾に要望し、4月7日に安西塾長に要望書を提出しました。(6-7 ページ参照)

そして、4月12日、午前中は報道関係者に、午後から一般の人たちに発掘調査の現地見学会が行われました。慶應義塾が公式HPで見学会開催を公表したのが4月9日ということもあって、日吉台地下壕保存の会では急きょ郵便はがき(約300枚)を会員に送り見学の呼びかけをしました。当日は300名を超える見学者が見られました。見学者からは「貴重な遺跡であり残してほしい」「戦争を忘れてはいけない」など話されていました。

発見された遺構・遺物は、地下壕入坑部3基、地下壕掘削時の排土用スロープ、コンクリート舗装のスロープと通路、地下壕掘削時の排土層(ズリ)、柱穴、トロッコのまくら木?、排水溝、通信用ケーブル?、水道管、高圧碍子などが出土しています。

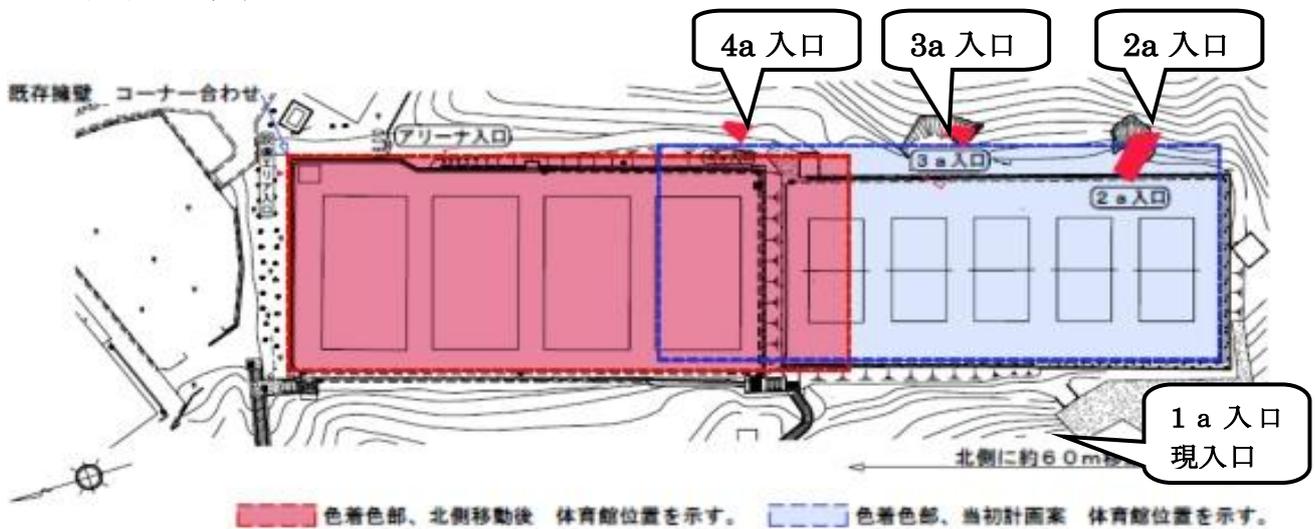
これらは日本軍が残した地下壕の中でも初めて発掘調査された遺構と考えられ、戦争末期に海軍が果たした役割を構造的・具体的に把握できる遺跡の一つです。これから発掘調査の詳しい分析が行われると思いますがその結果が期待されるどころです。

また日吉台地下壕に対しては、多くの研究者をはじめ横浜市、神奈川県、そして文化庁文化財部の担当者も保存活用に向けた期待をよせています。日吉台地下壕保存の会としてもこれら期待に応えるべく一層努力していきたい所存です。

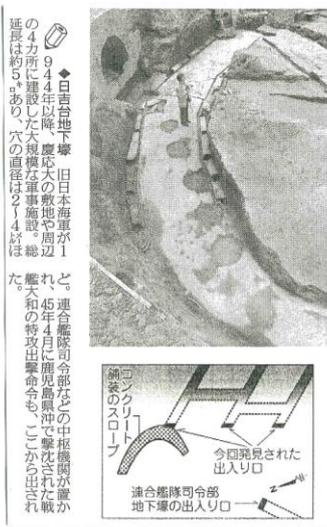
この調査結果や分析結果は今年中に公表を予定されています。

また、慶應義塾では、体育館新築工事のため、この遺跡は一度埋め戻し、その後、どのように活用するかをこれから議論して決めていく予定です。

○新体育館建設位置



<http://keio150.jp/news/2009/20090409.html> より転載



爆風防ぐ構造発見

旧海軍中枢機関 出入り口通路

同日が十二日発表された。調査は、ほかに三カ所の坑口、掘削残土を捨てるための斜面、通信ケーブルなども見つかった。坑口については戦後に埋められたことが分かっていった。いずれも昨年九月以降、体育館建設の際に出土。同大学は建設予定地をらし、大部分を保存することに決めた。

出土したスロープ状の通路、コンクリート舗装され、坑口につながる通路の両側には柱穴が通っている。旧海軍海北地区の慶応大日吉キャンパス

同日が十二日発表された。調査は、ほかに三カ所の坑口、掘削残土を捨てるための斜面、通信ケーブルなども見つかった。坑口については戦後に埋められたことが分かっていった。いずれも昨年九月以降、体育館建設の際に出土。同大学は建設予定地をらし、大部分を保存することに決めた。

出土したスロープ状の通路、コンクリート舗装され、坑口につながる通路の両側には柱穴が通っている。旧海軍海北地区の慶応大日吉キャンパス

第一次大戦末期に旧日本海軍が造り、今も慶応大日吉キャンパス(横浜市港北区)内に残る「日吉台地下壕」の外側で、出入り口につながるコンクリート舗装の通路が発掘された。通路は屋根や壁で覆われていた形跡があり、地下壕を空襲による爆風から防ぐための嚴重な工夫がうかがえる。専門家に「こうした構造の発見は全国初。当時の建設技術や工程が解明できる貴重な資料になる」と期待している。

「戦争遺跡保存全国ネットワーク」代表で、今回の遺構の保存方法を検討する同大副学委員会の委員も務めた十藤駿武・山梨学院大教授は「作戦の中核だった地下壕を守る嚴重さが推測される。全国でも類を見ない構造で、戦争末期の状況が伝わる第一級の戦争遺跡だ」と評価している。

(斉藤 大起)

2009年4月15日 神奈川新聞



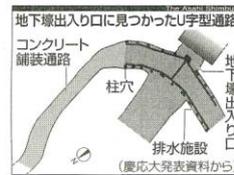
地下壕の出入り口を底にして、U字型をしていた通路に立って説明する安藤広道准教授＝横浜市港北区

地下壕「玄関」 U字型の通路

旧海軍中枢部跡地 慶大日吉キャンパス 爆風直撃避け？ 屋根も

旧日本海軍の連合艦隊司令部が置かれた日吉台地下壕がある、慶応大学日吉キャンパス（横浜市港北区）で、地下壕の出入り口の構造が新たに分かった。地下壕の出入り口でU字型のアプローチ（通路）が見つかり、12日、現地見学会などで公開された。慶大は「爆風が地下壕の奥に直撃しないようアプローチが作られたのではないかと見ています」（渡辺嘉三）

今回発見された通路は、幅約2.5メートル、長さ約10メートルのコンクリート舗装。地下壕の出入り口を底にして、U字型をして



いた。通路には屋根の柱跡も見つかった。地下壕の出入り口をU字型にしていたことについて、発掘を指揮した慶大民俗考古学研究室の安藤広道准教授は「爆風の直撃を避けるためではないか。柱穴もあり、屋根があったと考えられる」と見ている。また、この通路に斜めに掘削した土留用のスロープと土留土層や通信用と思われるケーブルなども見つかった。

地下壕出入り口に見つかったU字型通路

近頃の別の壕2カ所とあわせ、この壕の排水溝などは寸法が違い、安藤准教授は「緊急時の進作だったことを示している」という。戦争末期の44年9月、本土空襲激化に備えて旧日本海軍の連合艦隊司令部が慶大の学生宿舎に移った。約2カ月後、一部使用が始まった地下壕の長さは完成時延べ約2.6キロ、壕を覆ったコンクリートの厚さは約40センチ。設置作業には強制連行された朝鮮人が多数動員されたといわれる。終戦とともに出入り口などは破壊されたが、大半の壕は現在も日吉キャンパスの敷地内に残り、日吉台地下壕として、地元の市民グループが保存活動などを続けている。

また、この通路に斜めに掘削した土留用のスロープと土留土層や通信用と思われるケーブルなども見つかった。

今回の発見は、U字型通路は、慶大の150周年の記念事業の一環で08年9月、建設が始まった体育館の工事エリアにあった。慶大は工事を中断し、外部の専門家も交えて諮問委員会を設置して、保護を検討。その結果、体育館の位置を北寄りに移し、地下壕の出入り口保存を1月までに決め、3月から調査してきた。

2009年4月14日朝日新聞

諮問委員会座長の坂詰秀一・立正大学名誉教授は「終戦当日まで海軍中樞で使われた一般の戦跡。学内だけで判断せず、考古学的に評価するのはさすが」。安藤准教授は「これまでの聞き取り調査で出入り口の構造の話はなかった。当時を知る人に見てもらい、さらに詳細を明らかにしたい」と話している。

12日後の見学会には民大ら約300人が参加。大学生の息子が小学生の時に司令部跡を見学。その縁で「日吉台地下壕保存会」に入会した横浜市港北区下田町3丁目5番の主婦股染静子さん（81）は「戦争を忘れていけないと改めて思いました。会では私が若い頃は、若い学生に見てほしい」と話した。



2009年4月11日見学会様子





4 a 入口 入口前にスロープが見え、低くなっている。手前は下水管の通り道



柱の穴

4 a 入口スロープが左右に4 mある。スロープの両端に柱の穴がある。また通信用ケーブルらしきものもある



通信用ケーブル？

通信用ケーブルか？



その拡大図



爆風よけの屋根を支えていた柱の穴

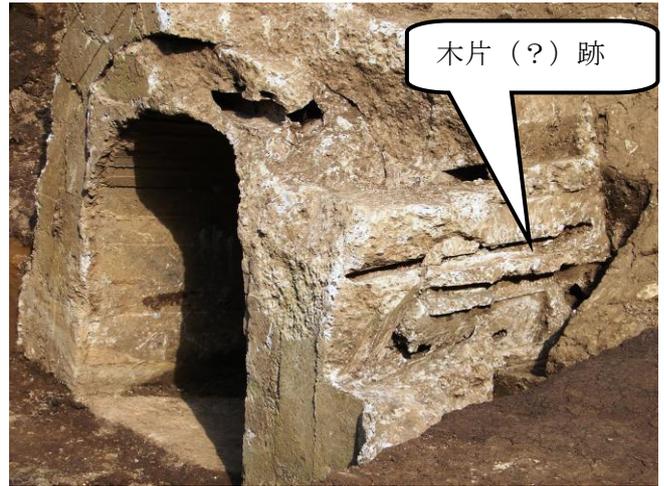


ズリ層
(白く見える)

地下壕掘削時の排土層 (ズリ)



2 a 入口 手前はコンクリートのスロープ左右より下がっている



2 a 入口拡大図 右手前は少し削られているために内部が見える。ところどころに木片?を入れた跡が見える



スロープ上の土中に高圧碍子を発見



水道管

慶應義塾への要望書 (2009年4月7日)

2009年4月7日

慶應義塾長 安西祐一郎 様
常任理事 西村 太良 様

要 望 書

日吉台地下壕保存の会
会長 大西 章
(慶應義塾高等学校教諭)

慶應義塾におかれましては貴学の発展のために日夜ご尽力ください、併せまして日吉台地下壕保存の会には一方ならぬご高配を賜りまして誠にありがたく深

く感謝いたしております。

さて、慶應義塾では、創立150年記念事業として、蝮谷体育館（仮称）新築工事に伴う掘削工事が進められていますが、昨年9月末に日吉台地下壕（軍令部第三部・東京通信隊・航空本部等地下壕）の出入口3ヶ所（2a, 3a, 4a）が発見されました。そこで、慶應義塾は「日吉台地下壕に関する諮問委員会」を組織し、第1案（記録保存案）、第2案（2a埋没案）、第3案（北側移動案）を示して諮問しました。諮問委員会からは、1月21日に「第3案：北側移動案」（体育館を約60m北に移動する）の答申を受けて、慶應義塾管財部から同主旨の内容を日吉台地下壕保存の会にも報告説明していただきました。

この説明で慶應義塾が日吉台地下壕について日本の近現代史研究のみならず、戦争の記憶を後世に伝える触媒として学術的・教育的価値を持つ文化財として高い評価を下され、第3案をベースにした高校・大学の教育研究環境の充実改善と文化財保存問題の両立を果たす真摯な取り組みがなされていることに、日吉台地下壕保存の会として心から深甚の感謝を申し上げます。

3月8日～4月4日には4a付近を中心とした体育館建設に伴う「記録保存」発掘調査が進められましたが、新たに遺構・遺物が発見されて状況が変化してきました。4a地下壕坑口前面に広がるコンクリート敷きスロープ（左右約4m）、柱穴、配水溝、通信用ケーブル、水道管、枕木など遺構は日本軍が残した地下壕の中でも初めて発掘調査された遺構と考えられます。日吉台地下壕がアジア太平洋戦争末期に果たした役割を構造的・具体的に把握できる存在となってきたのです。蝮谷体育館建築計画と共存して、是非ともこれら文化財の保存活用を模索していただきたいと願っております。また横浜市・神奈川県は勿論、文化庁文化財部の担当者も日吉台地下壕は貴重な戦争遺跡であるとして保存に向けた期待を寄せているようです。

慶應義塾におかれましては、これらのことをよろしくご賢察くださいますと何とぞ私たちの要望が叶えられますよう改めてご検討下さいますようお願い申し上げます。

記

- 1、軍令部第三部・東京通信隊・航空本部等地下壕と今回発掘調査した部分を併せて、できるだけ広く現状保存を追求すること。
- 2、発掘遺跡・遺構の内容を公開し、現地説明会を実施して下さること。

以上

報告**第1回《日吉をガイドする》講座は大盛況**

運営委員 亀岡敦子

3月14日午後1時、心配されていた雨も降らず、来往舎にはぞくぞくとひとが集まり、第1回《日吉をガイドする》講座がはじまりました。会報90号でお知らせしていましたから、もちろん会員さんも大勢参加されましたが、港北区の生涯学習情報誌「楽・遊・学」で情報を得たという方が多かったようです。

最初に、「日吉台地の成り立ち—自然地理学の立場から—」と題して松原彰子慶應義塾大学経済学部教授の講演がありました。パワーポイントと配られた資料を駆使して12万年まえからの温度変化による、関東平野のようす、そして私たちが住む日吉のようすなど、わくわくするようなお話でした。「海進期」「海退期」という言葉もおぼえ、貝塚ののこる訳も納得しました。

つぎに私たちの会の新井揆博副会長の「横浜と川崎の戦争遺跡に学ぶ—私のまちから自分の足で目で戦争をつかむ—」という身近な戦争遺跡についての講演がありました。陸軍登戸研究所、陸軍東部62部隊、海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊、連合艦隊司令部など、みな生活圏にあるのです。戦争の語り部ともいえる跡が、地域にあること、そしてそれについて知らなかったということは驚きでした、いう感想をのこして帰られた方がいました。

過去3年間、日吉をガイドするための「ガイド養成講座」を開き、受講生のなかから新しく数人のガイドも誕生しました。成果はあがったと自負していますが、今回のような日吉についてともに学ぶ講座も、なかなか面白いものでした。この講座の参加者は、なんと85人という人数であったということを、報告いたします。第2回は6月20日に、考古学の立場からの日吉の遺跡についての講演と探訪を計画しています。

報告**横浜空襲合同調査研究会始まる。**

—横浜空襲を記録する会と本会との合同研究会—

これまで本会では日吉周辺の米軍空襲について、独自の聞き取り調査、実態調査などを行ってきましたが、今年の1月から横浜空襲を記録する会との合同研究会が始まりました。これまで3回の研究会の中で、日吉近辺の空襲の状況、戦時中米軍が日吉上空から撮った航空写真、菊名、大倉山方面の空襲について、など新しい事実が明らかになってきました。

今後菊名、大倉山方面の空襲、大倉山の海軍書類倉庫の実態調査を随時行っていくことになっています。今後の研究の中で横浜北部の空襲の実態、日吉の海軍司令部についての米軍の認識などが明らかになってくるのが期待されます。総会の前に行われる調査報告でその中間報告が行われます。

寄稿

横浜・川崎 平和のための戦争展に参加して

○若手に表現の場を——戦争体験継承の形を考える

竹峰誠一郎（三重大学研究員）

「第16回 川崎・横浜 平和のための戦争展2008」の最終日にあたる10月11日(土)の午前に開かれた、<若者の発表「平和学の視点から」>に発題者の一人として参加し、「核実験場とされたマーシャル諸島はいま」と題した話(※)をした。その後、同じく発表をした内山日花李さん(中央大学3年)、益満隆行さん(専修大学4年)、斉藤大起さん(神奈川新聞社記者)と私の4人でパネル討論をおこなった。

戦争体験の継承といえ、15年戦争の時代を生きた年配の人が話をし、若い人が聞く、こうした光景が思い描かれるだろう。しかし戦争展の会場には、全く逆の光景があった。

<若者の発表>で話した4人の中で、31歳の私が最年長だった。残りの方は20代で、しかも大学生の2人は20代の前半だ。20代、30代が自分のテーマを持ち調査や取材したことを発表する。そして年長の方々が会場で耳を傾ける。

これも戦争体験の継承の営みだったといえるのではないだろうか。「川崎・横浜 平和のための戦争展」の取り組みは、若手に表現する場面を創るもので、戦争体験の継承のありかたを考える上で、貴重な実践だと私は思う。戦争体験継承の営みの中で、若い人をお客さんに固定化しないことは大切だと私は考えている。これからも「若者の発表」のコーナーは続け、その実践を広めてほしいと思う。

ただ「若者の発表」という名称にはどこか違和感があった。「若者」という言葉には、上から下をみる視点が入っていると感じるのは私だけだろうか。今年の討論の様子では、もっと時間があればとも思います。テーマに掲げられた「平和学の視点」とは何なのかも深めあいたかったと思っています。

※マーシャル諸島のことや、同地での米核実験問題に興味がある方は、拙著をお読みいただくとうれしく思います。

*中原聖乃・竹峰誠一郎(2007)『マーシャル諸島ハンドブック——小さな島国の文化・歴史・政治』凱風社

*前田哲男=監修、高橋博子・竹峰誠一郎・中原聖乃(2005)『隠されたヒバクシャ——<検証>裁きなきビキニ水爆被災』凱風社

寄稿

横浜・川崎 平和のための戦争展に参加して

専修大学 益満隆行

私は、去る10月8日から11日にかけて、慶應義塾日吉校舎で行われた第16回川崎・横浜平和のための戦争展にて報告をさせていただきました。このような場所で発表させていただくことは初めての経験でしたが、発表を通じ、様々なアプローチで戦争と向かい合っている方々にお会いできたことは、私にとっても本当に良い体験になったと思っています。

私たちは、日頃専修大学の新井勝紘ゼミナールにて日本近現代史を専攻しておりますが、日本の近現代史と戦争は深く関係しているといえます。ゼミで活動を行っている、戦争というものを見据えた上で、歴史と向き合わなくてはならないと思うことが多々あります。

今回、こうして戦争展に参加させていただくことから、多くの方々が戦争の記憶を後世に留めるために努力されていることを知ることができました。そして、この体験を通じて最近考えるようになったことは、戦争そのもの、そしてそれに至る過程だけではなく、戦争に参加した人々が、その後どのように生きていったのか、そこまでを含めて考えていく重要性です。

人々はどのように戦争と向かい合い、あるいは合わされていったのか。そしてそれを経て、そこから何を考え、どう生きていったのか。このことについて知り、考えていくことは、戦争を過去の出来事としてではなく、自分たちにも関わりのある今日的な問題として考えるために、非常に重要なのではないかと思います。

これからも、今回の経験を糧に、自分なりの方法で戦争と向き合い続けていけるようになりたいと考えています。そのためにも、これからも新井ゼミだけにとどまらず、積極的に活動を行っていきたいと思います。

◎戦争遺跡見学会の資料紹介 (第2回)

新井揆博

会報90号の続編です

2 横須賀軍港めぐり・観音崎砲台群・戦没船員の碑の見学

見学会行程(11月24日)

*京急汐入駅集合(10:00)→軍港めぐり乗船場近くでガイドンス(10:30)→軍港めぐり(11:00~12:00)→<昼食>→観音崎バス停集合(13:00)→ガイドンス(13:30)→青少年の村・弾薬庫など(13:40)→観音崎第一砲台(13:50)→観音崎第三砲台(14:10)→戦没船員の碑・大浦堡壘砲台(14:30)→うみの子とりで・腰越堡壘砲台(14:45)→三軒家砲台(15:15)→横須賀美術館前にて散会(15:30)

近代の横須賀は軍都

1) 横須賀の戦争遺跡

神奈川県は、首都東京に隣接していることもあって、明治以来軍事上の枢要地帯が形成された。海軍は1884年に東京湾の入り口を防衛する横須賀鎮守府を置き、陸軍は91年に横須賀重砲兵連隊を置いた。三浦半島東南岸一帯は要塞化され、横須賀は世界屈指の軍港、神奈川県の軍都の代表として発展した。鎮守府一つとってみてもその規模は大きく、日本海軍最大の基地であった(現在はアメリカ海軍と自衛隊の基地)。また管轄下の海軍工廠は、日本にあった12工廠の中で一番歴史が古く、それだけに日本近代の歴史に重要な役割を果たし、市民生活もいろいろな制約を受けてきた。海軍工廠の諸施設のうち造船・造機は横須賀市中央地域、造兵・軍需は田浦船越地域、航空隊・航空技術廠は追浜地区と大別でき、それに伴う施設も各地域に造られた。しかも多種多様でたくさんの戦争遺跡が残存している。敗戦時における横須賀市の旧軍用財産は、土地1876.9万㎡(約570万坪)、250件と膨大な数量にのぼっていた。

*旧軍用財産は「横須賀市史」下巻による。

2) 横須賀海軍工廠…海軍の軍事力を支えた巨大な軍事工場

造兵部・造船部・造機部・機雷実験部・光学実験部・航海実験部・電池実験部・通信実験部などの各製造部局をもち、海軍の軍事力を支えた。

1945年敗戦時の主要設備概数

土地 工廠構内 約110万㎡

建物 庁舎工場等総建坪約30万㎡、延約40万㎡で大部分は鉄骨亜鉛ふきであった。

機械施設 工作機械・施設機械等約10000台

人員 約87000人(1945年工廠終戦時)
 建造艦 戦艦6隻 航空母艦1隻 巡洋艦7隻 潜水母艦2隻 駆逐艦9隻
 潜水艦25隻 海防艦6隻 輸送艦2隻

戦争末期には、特攻兵器を製造

蚊龍 呉が主体でその他官民工場で製造(110隻完成)
 海龍 横須賀が主体で製造(224隻完成)
 回天 呉が主体となり、光・横須賀も参加(約400基完成)
 震洋 横須賀(6200隻完成)
 魚雷艇 横須賀・呉(大分)・佐世保・舞鶴(約1000隻)

製造艦艇数(『横須賀海軍工廠外史』より)

3) 海軍航空技術廠…戦前・戦中を通じて日本最大の航空研究機関

航空機やエンジンの試作・飛行実験・審査、発注した民間会社の指導・監督などを行っていた。戦争末期には13の作業部を擁し、支廠を含めると職員(大部分は武官)1700名、工員3万1700名の規模に達した。戦局の悪化にともない人間爆弾飛行機「桜花」を戦場に送り出し、ロケット推進の体当たり機「秋水」を開発した。工場の一部は残っている。本庁舎は、所有者によって工場新設を理由に2004年12月に取り壊されてしまった。跡地には、横須賀市によって昭和天皇行幸碑と説明板が立てられている。

4) 爆撃をうける戦艦「長門」

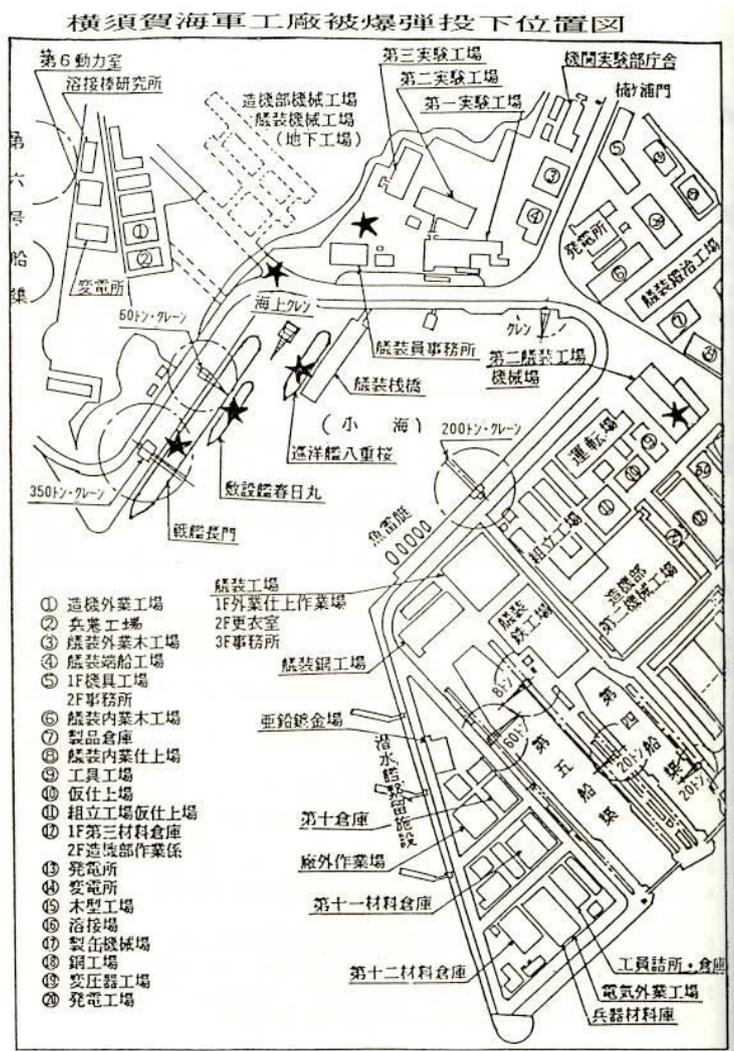
横須賀の空襲は現在まで判明しているところでは15回、右記の図は1945年7月18日、横須賀軍港が米軍機の攻撃を受けたときの状況を示すもので、このとき、小海湾に停泊中の戦艦「長門」に爆弾が命中、中破し、艦長以下35人が死亡、隣の特務艦「春日丸」が爆沈、駆逐艦「八重桜」が中破、造船部の工場にも爆弾が投下された。

(『横須賀

海軍工廠外史』横須賀海軍工廠会
 1991年)より

今、横須賀港は米海軍・自衛隊の基地

○ 米原子力航空母艦「ジョージワシントン」が08年9月25日、海上自衛隊イージス艦「こんごう」に先導されて横須賀港12号バースに入ってきた。米空母が世界にただひとつ米本土以外に母港としている横須賀港に入ってきた。このために、日本では12号バースの延伸・拡幅工事を済ませ、これまで277mの岸壁を424mにまで延ばし幅も海側に5m広げ、航空母艦専用埠頭として迎え入れた。



○ 「ジョージワシントン」は、満載排水量10万4017トン、全長332.85m、飛行甲板幅78.34m、喫水11.7m、就役年月日1992年7月4日、蒸気発生システム原子炉二基搭載（一基あたり熱出力60万キロワット）、速度30ノット以上（最大35ノット）、艦載機搭載数（最大）約85機、乗員総数5750人、母港バージニア州ノーフォーク。

○ 次いで米原子力潜水艦「オハイオ」（水中排水量1万3750トン、乗員155人）が08年10月16日、12号バースに接岸。海軍特殊部隊が「SEAL3」が乗り組み、巡航ミサイル「トマホーク」154発搭載できる能力をもっている。

○ 日本時間5月22日午後、原子力空母「ジョージワシントン」が太平洋上で80区画に及ぶ火災事故を起こした。もし、原子炉が火に つつまれたら、原子炉事故発生で住民は、風下の人々は？



○ イラク戦争が開始される23日前の2月25日、横須賀に配備されている海上自衛隊の補給艦「ときわ」が米国の給油艦「ペコス」を介して空母キティホークと巡洋艦「カウペンス」に給油。「ときわ」をはじめ4隻の給油艦が属する第1海上補給隊はこの横須賀にある。

○ 横須賀の米軍基地（横須賀海軍施設）

面積 236万3263㎡ 建物
88万4150㎡ 水域 約819万
8000㎡

おもな部隊等 在日米海軍司令部（CNFJ）、米海軍横須賀基地司令部、米海軍だ7艦隊司令部（旗艦・ブルーリッジ内）、第15駆逐戦隊司令部、第7艦隊潜水艦隊司令部、（第5艦隊潜水艦隊司令部をかねる）、西太平洋艦隊訓練群（ATGWP）、極東海軍施設技術部隊、艦隊産業補給センター、（FISC）、海軍海洋業務群（DDYJ）、極東海軍コンピューター通信ステーション、米海軍艦船修理廠（SRF）、海軍施設本部、横須賀海軍病院、その他

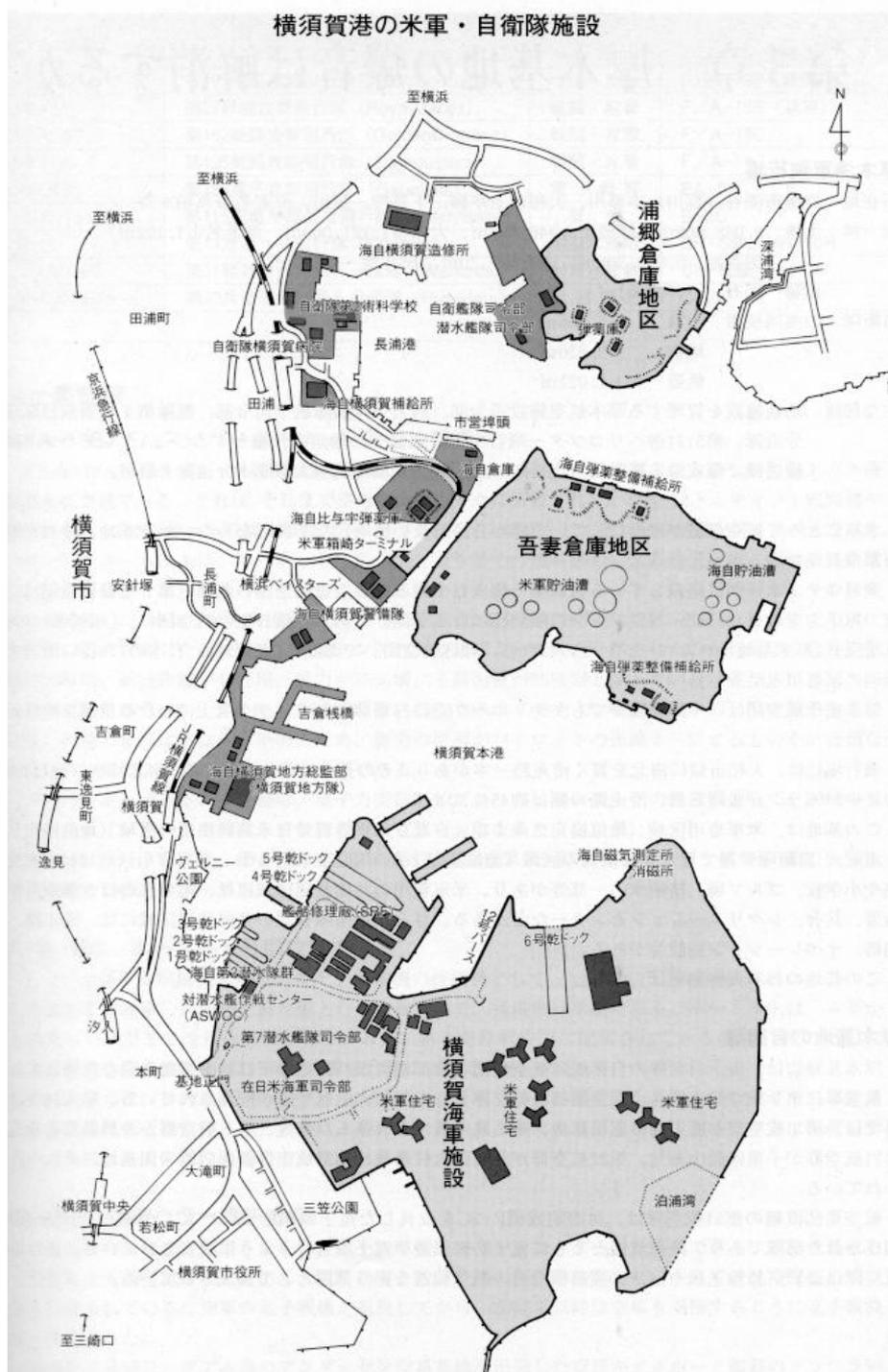


原子力空母「ジョージワシントン」消火に12時間かかった内部の一コマ

（上記2枚の写真は米海軍のホームページより）

○ 横須賀の自衛隊

横須賀市内には、海上自衛隊の戦闘部隊の本拠地である自衛艦隊司令部のある船越庁舎や、横須賀地方隊の擁する地方総監部が置かれている逸見庁舎、横須賀警備隊などがおかれている長浦庁舎などのほか、これらの出先や附属の海上自衛隊施設が多く存在する。



『神奈川の基地はどう変わるか』日本共産党神奈川県委員会 2008年5月) より

寄稿

大師高校「産業社会と人間」意見発表会に出席して

中澤 正子

神奈川県立大師高等学校から標記の発表会のご案内を頂き、地下壕見学会の日を思い出しながら出席した。2008年10月30日、20名の生徒が2人の先生と見学に訪れた。当日はガイドダンスを会議室で行ない、見学に移るが移動に時間がかかる。見学会には丁度良い20名なのにこんなに時間がかかるとはと先が思いやられた。若い生命力あふれる年ごろなのに何故かだるそうにゆっくりと歩く。

見学は定例会の予定コースをかなり丁寧に説明して会議室に引き上げ、まとめの会が行なわれた。一言ずつ感想が発表されたが、見学の内容に関する言葉は殆どなく、案内に対するお礼の言葉が多かった。最後に当日一緒に見学された昭和史研究家・保阪正康氏からお話があった。

「説明を聞いても分からない言葉ばかりだと思う。連合艦隊と言っても分からないと思うが、今は自分の目で見、感じ取ることが大切である」という主旨であった。

今回の意見発表会ではこの1年間の体験がスライドを写しながら発表された。「ふれあいキャンプ」、「事業所・施設見学」があり、交流体験として「日吉台地下壕」、「高津養護学校」、「侍従川に親しむ会」等の交流が発表された。地下壕に関しては日吉の空襲被害の説明、耐弾式堅穴坑（敗戦直後アメリカ軍はこれを見て「茸型の出入口を持った迷路の地下大要塞」といったそうですとのナレーション）、作戦室、寄宿舎、上原良司を語る場面などの確に選択されたスライドと語りがあり、むすびの言葉は「この地下壕が2度と戦争に使われることのないように。地下壕を見ることにより戦争をやってはいけないことが語り継がれるように」というものであった。

「みんなと一緒にイヤ！！」と個性を磨こうと努力する人がおれば、一方では、見学やアルバイトなど人との交わりを通して、人としてやらなくてはならないことを見い出したり、責任を持つことの大切さを学んだり、多様化社会に対応すべくさまざまな生き方を模索する若者の姿があった。私には現代の高校生の持つ頼もしさやエネルギーを間近に見る貴重な体験であった。応接室での校長先生はじめ関係の先生方と学外から参加した4人との懇談も生徒の実行力を讃えるものであった。

企画

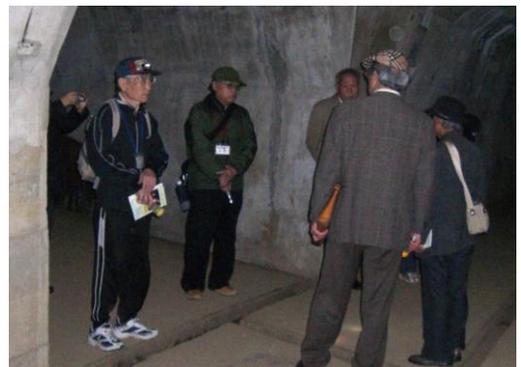
地下壕ガイドから一言

地下壕ガイドをつとめて

高橋保二

平成19年1月19日に第3回ガイド講座を終了して、1月23日から現在平成21年3月末まで約40回ガイドをつとめて参りましたが、当初考えていたのは正に大違いで、毎回一部分の説明を担当するので何度かやれば「習うより慣れろ」で直ぐにマスター出来るだろうと思ったのは大甘だということに気がきました。

一つにはガイドする対象者が小学校高学年から80歳以上の太平洋戦争を軍人として戦った方まで千差万別ということもあり、毎回話し方や内容を若干変える必要も生じることもあって、大事な年号や数字を間違えたり生来の方向音痴で先頭に立つと方向が判らなくなるとんでもない所へ案内するなど失敗談なら数知れずです。それでも新井先生はじめ所先輩方のご指導のお



左端が高橋氏

陰でここまでやって参りました。

私自身小学校2年生で東京大空襲、直後からの群馬県への集団疎開、3年生の8月15日に敗戦、その後のインフレ、食糧不足、3年以上に及ぶ校舎も黒板も教科書もない教育の空白を体験した者として今後も微力ながら平和のためのガイドの一員をつとめて行きたいと思っております。よろしくお願いたします。

転載 日吉南小学校HPより (2009年1月20日見学)

6年生 日吉台地下壕の見学に行ってきました

第二次世界大戦の時、大本営の司令部として使われた大地下壕には、六十数年の時間が封じ込められているような感じがしました。「日吉台地下壕保存会」の皆さんによる詳しい説明をいただき、当時の様子や戦争の悲惨さを真剣な面持ちで聞きました。



「防空壕に入っているだけでも亡くなってしまったと聞くと、どこでも安全ではないと思いました。小さな子供まで亡くなったと聞くと、戦争はひどいと思いました。」

「ここから指令が出て、たくさんの方が死んでいったんだと思うと悲しくなります。それに、戦艦大和の状況が日吉に入っていたのを知って驚きました。私は地下壕に入って、日吉でも戦争があったんだと実感しました。」

案内して下さった保存会の方々は、「とても真剣に話を聞いてくれて大変嬉しく思います。」「質問や問題に積極的に答えてくれて、感心しました。」とおっしゃって下さいました。



30mの地底へ出発。
64年前の空気を感じました。真っ暗な地下道になぜか大きな声でしゃべったり、笑ってしまったり...

入り組んだ地下壕を案内していただき、説明を聞く内に次第におしゃべりも止まりました。



指令本部があった場所で

地下壕ができるまでの過程や日吉が爆撃された話など真剣な面持ちで聞きました

約40分の地下壕体験。日吉の大きな歴史を一つ知りました。



<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/hiyoshiminami/tayori/h20gakkoudayori/2gatu.pdf>

お知らせ

2009 平和のための戦争展 in よこはま

5月29日～31日 かながわ県民ホールセンター (横浜駅西口)

展示 横浜大空襲他 約500点 (横浜の戦跡/栄区燃料廠/船と戦争/憲法9条/日吉台地下壕他)

特別企画 講演「軍隊のない国家」他

主催 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会 (045-241-0005)

12年目を迎える「平和のための戦争展 in よこはま」が5月29日(金)から31日(日)まで3日間開催されます。日吉台地下壕保存の会は今年も展示で参加します。皆様お出かけください。

☆☆開催中、日吉台地下壕のブースの展示準備・開場係などお手伝いいただける方はご連絡ください。(045-562-0443 喜田まで) ☆☆

活動の記録

(2009年1月～4月)

- 1/24 定例見学会 40名 会報90号発送(慶應高校物理教室)
 1/26 地下壕見学会 港北区生涯学級「イナバウアー」 68名
 2/9 地下壕見学会 下田町自治会 40名
 2/19 運営委員会(慶應高校物理教室)
 2/22 横浜大空襲を記録する会との合同研究会(菊名コミュニティハウス)
 2/28 定例見学会 59名
 3/3 地下壕見学会 田園調布学園高校3年生・職員・保護者他 100名
 3/10 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会(法政第二高校)
 3/13 地下壕見学会 藤沢市藤ヶ丘中学校2年生・職員 188名
 3/14 《日吉をガイドする》講座(来往舎中会議室)
 日吉台地下壕紹介展示(鯛ヶ崎プレイパークこどもまつり)
 3/18 地下壕見学会 一二三四五会(山口大学OB ひふみよい会) 6名
 3/19 施設ボランティアもくれんの会 26名
 3/22 横浜大空襲を記録する会との合同研究会(菊名コミュニティハウス)
 3/28 定例見学会 29名
 3/30 発掘調査中の軍司令部・航空本部等の地下壕現地見学 運営委員他 9名
 3/31 地下壕見学会 エンジョイシニアライフDANの会 21名
 4/12 慶應義塾による軍司令部・航空本部等の地下壕入口の公開見学会
 4/13 地下壕見学会 地下壕発掘調査員 10名
 4/14 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会(法政第二高校)

予定

- 4/17 運営委員会 会報91号発送(慶應高校物理教室)
 定例見学会(土曜日) 4/25・5/2・5/30・6/27・7/25

定例見学会は原則毎月第4土曜日に行っています。なお日程が変わる場合もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。

(見学申込先 TEL&FAX 045-562-0443 喜田)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/> (新アドレス)

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
 代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
 日吉台地下壕保存の会運営委員会